赤い糸、繋がってる？

双水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
赤い糸、繋がってる？

【Ｎコード】
Ｎ４５６９Ｍ

【作者名】
双水

【あらすじ】
ある日突然、双子の妹・葵と共に異世界へ召還された、蛍。そこには美形さんが二人いて「自分の花嫁はどっちかな？」と爆弾発言！ええっ、私たちの運命の赤い糸は異世界の人と繋がっていたんですか？　二人ともに？

それは、突然に。

高校に入学して、もうすぐ夏休みだというある日、仕事の都合で両親がしばらく海外へ転勤することになった。

両親は当然娘二人も連れて行く気だったみたいだけど、私は語学力も土地勘もおぼつかない知らない土地に行くのは怖かった。入学したばかりだし、もう高校生だし、と妹ともども説得した。最初は駄目だと言っていたが、最後には折れたのかしぶしぶながらも承諾してくれ、私たちは日本に残ることになった。

私、日向蛍には葵という一卵性の双子の妹がいる。夏休み中に誕生日が来るからもう直ぐ１６歳になる。けれどいくら夏生まれだからといっても、子供の名前を夏の風物詩にするなんてわが親ながら――苗字が日向だから葵と。昼と夜で対になるように蛍と名付けたんだって――安直だなぁと思う。

同じ顔で同じ身長なはずなのに、人懐こくて、可愛くて、しっかり者の妹とは対照的に、引っ込み思案で、妹の影についつい隠れてしまいがちの地味な私。

葵は県内トップクラスの進学率を誇る公立高校に通ってるけど、私は私立の女子高で。

腰まである髪の長さは同じなのに、サラサラのストレートロングに、くりくりした瞳の葵と、
一度癖が付いたらなかなか直らない猫毛で仕方なしにおさげにしている、眼鏡の私は全然似ていない。

中学の時、口が悪い男子からは「全然似てないけど本当に双子？」とか「地味メガネ」とか散々言われてて、自分でもそうかもとは思うけれどすごく悲しかった。
だから私は今でも男の子が苦手。

葵は「大人し過ぎるとは思うけど蛍のほうが女の子らしいし。絶対名前は蛍の方が良いよ」と言ってくれるけれど、葵を見てると、私もこんな風になれてたらなぁと思う。
私のほうがお姉ちゃんのはずなのに威厳なんてものは無いんだ…。
もちろん葵のことは嫌いじゃないし、姉妹仲だって良好だよ。

空港で両親を見送った帰途で、食材を買って帰ろうと、スーパーに寄る。
何にする？手軽にカレー？といった取り留めの無い会話をしながら次々と買い物カゴに品物を入れていく。会計を済ませ、仲良く荷物も半分づつ持ち合うようにして店から出る。
ちなみに食事当番は私。料理をするのは結構好きだったりするので自分から立候補した。

まあ、それはともかく。
そう、店から出ただけのハズだったのに。

「…それで？　どちらが私の花嫁だというのだ？」
「…俺の花嫁はどっちなのかな？」

スーパーから出たハズなのになぜだか室内に居て、
目の前にそんな意味不明の言葉を放つ二人の美形さんたちから覗き込まれている私達。

１６年間生きてきて、今日ほど運命を呪った事は無い。

ここは異世界で、彼らの伴侶となる女性を召還する儀式をした。
その結果、召還された花嫁が私たちだと言うのだから。

それは、突然に。（後書き）

王道ネタですみません。

気になる、糸の先。

「ええっと…花嫁って……冗談、ですよね？」
私よりも早く浮上できた葵が、引き攣った笑顔でそう返す。

「冗談で召還儀式をしたりしないさ。どんな娘が俺の運命の花嫁なのか戦々恐々だったんだが、こんな可愛い娘で良かったよ。君、名前は？」
黒髪・黒眼の美形さん――アランさんという人がニコニコと葵を覗き込む。
１８５ｃｍはあるだろう長身と、健康そうな小麦肌、引き締まった程好い筋肉と、
この人絶対女の人にもてるんだろうなと確信できるくらい、男の色気あふれる美丈夫さんだ。

「待て。召還したのは私の花嫁でもあるだろう。ならこの娘は私の花嫁だということだ」
金髪・蒼眼の美形さん――レオニールさんが不機嫌そうな声でアランを見やる。
映画俳優ですか？と思わず聞きたくなるくらいの美形さんだー。身長は１８０ｃｍくらいかな？　どっちかというと頭脳派・・・なのかな？　表立っては騒がれないけど隠れファンが沢山いそうな雰囲気な人だ。

・・・二人して葵の取り合いしてるし。
あー。二人とも葵狙いですか。やっぱり可愛い子のほうが良いもんね。
何時もの事だけど外れ扱いの現実を突きつけられて悲しくなる。

そうこうしているうちに自己紹介をしはじめている。
「私は日向葵（ひなたあおい）。葵です。こっちは双子の姉のーー」
言いながら、葵は俯いてた私の肩に手を添え、そっと前に立たす。
「……日向蛍（ひなたほたる）。蛍です。もうすぐ１６歳です」
俯きがちになりながらも、なんとか自己紹介した。

◆◇◇◆◇◇◆◇◇◆◇◇◆

彼らの説明によると、この国の王族の男性は２０歳になると『運命の花嫁』なる女性を探すために召還の儀を執り行うらしい。

もともとは別の目的で召還の議をして誤って現れた女性と恋に落ちた王が居たらしく、それが始まりらしい。
もちろん過去にはこの儀式を否定して行わなかった人や、儀式をした振りして自分で好きな子を連れてきて、召還された娘と偽った人も居たそうだけど、王座に付いたとたん若くして儚くなったり、近隣の国に攻め込まれそうになったりと、碌な事が起こらなかったために召還の儀と赤い糸の確認が義務化されたんだって。

召還される側にとっていきなり「嫁になれ」なんて甚だ迷惑な話なのだけれど、運命に選ばれれば、たとえ農民の娘だろうとおかまいなしに王妃になれるそうで、民衆からは好意的に受け取って貰っているそうだ。

けれど、儀式で召還されたのがたとえ老婆であろうと、産まれたばかりの赤子であろうと問答無用で婚姻を結ばないといけない仕来らしく、召還する側にとってはある意味恐怖の儀式らしい。

といっても大抵が現れた女性とは、すぐに恋に落ちるみたいで問題はない、そうだ。
赤い糸で繋がっている＝好みの集大成？　なのかもね。

といってもアランさんとレオニールさんは王族でなく、王家を支える双頭の大貴族なんだって。
この国では王家を筆頭に双家、双家の下に４家、さらに４家……と階級が続いていて、
嫡男が１５歳になる年にどれだけ優秀な存在になれたかによって、実力で家の階級が換わるそうだ。長男は責任重大って事。大変だね。

って事はこの二人はかなりの実力、権力者って事なんだよね。
偶然とはいえ、そんな人達の花嫁として召還されたって事は、実はすごいことなのかも。

レオニールさんとアランさんは王子様と幼馴染で、年令も近いせいか王子様とも仲が良いんだって。

本来は二人とも仕来りとは無関係なんだけど、召還の儀を控えた王子様を、アランさんが散々鹹かったらしく、王子様が「お前たちもやらないとやらない」とごねたそうで、周囲から責任を取って召還の儀をしろと怒られたらしい。

レオニールさん自身はからかわなかったそうだけど、とばっちり参加を強要されたそうだ。
そして私たちが召還されたのなら、私たちが恨むならアランさんということになる、よね。

だけど、召還されました。じゃあ結婚しましょうね。っていうのは無理！

「あの…今回は、無理に結婚とかしないでも、良いんじゃ…な…いです…か？」

今回は王族ってわけじゃないし断っても良いんじゃないかと思って、意を決して聞いてみようとした…けど、語尾が途切れがちになったのは、アランさんが呆れたような顔をしてたからだ。

「人の話聞いてた？言ったよね、義務だって」

ううう。この人苦手かも。言い方がきついんだもん。

たとえ同じ言い方でも、それがイケメンさんからだとしたら攻撃力倍増されて余計に傷つくって自覚して欲しい。

涙目になりながらも誰か破棄を肯定してと周りを見渡す。

「残念だが、それは無理だろう。私たちが破棄をするならとアイツもうるさいだろうし」

目が合ったレオニールさんが肩をすくめる。アイツって王子様のことだよね。

そう言われると確かにそうかもしれない。

「じゃあ私達は召還されなかったことにして、元の世界に帰れませんか？」

と葵も冷静に、けれども怒りを押し込めた声で問いてくれた。

持つべきものは双子の妹だ。やっぱり葵も同じように理不尽に感じてる。

だけれど「無理だな」「無理ですね」と一蹴された。

「なんでよ！？」「どうしてですか？」

葵と同時にいきり立つ。見事なシンクロだ。

私だって主張するときはするんだからっ。

「残念ながら、君達を元の世界に戻せる手がないんです」

レオニールさんの言葉に瞠目する。…戻れない、の？いやだそんなの困る。

衝撃の事実に泣き出しそうになった。

「第一、召還の儀式に挑んで誰も現れなかったら、そいつは一生独身で清らかに過ごさなきゃいけないんだぜ？　そんなの俺は嫌だね。それにせっかく可愛い子が召還されてきたというのに、みすみす返す男がいるわけないだろう」

と、続くアランさんの言葉に脱力したけれど。

◆◇◇◆◇◇◆◇◇◆◇◇◆

何はともあれ、召還の儀式の結果を報告しないといけないという話の流れになって、どっちがどっちの花嫁か調べることになった。

その方法は召還されたら必ず繋がってるはずの『運命を司る赤い糸』を具現化して、繋がっている先を確かめるというのだ。

もう戻れないから腹を括れ。というのなら、私の運命の人は…アランさんは苦手なタイプっぽいしレオニールさんの方が良いな。レオニールさんでありますように。と願いながら小指の先を見る。

けど糸は空中に溶けるように途中から見えなくなってた。
不審に思いながらも葵はどうだったかと聞こうとして、目を見開いた。

葵の小指の糸はアランさんとレオニールさんの両方に繋がっていた。

「…何よコレ」
「…マジかよ」
「…困りましたね」
三者三様に糸の先を見やり、呆然とつぶやく声が聞こえる。

衝撃が強すぎて、私は声も出なかった。

気になる、糸の先。（後書き）

…ごめん、蛍。

もつれる視線の、その先に絡み合うもの。

痛い！
痛すぎる！！
何なの、この展開は！？

四人ともどっちかがどっちかと繋がっているんじゃなかったの？
そう言っていたよね？　アランさん？　レオニールさん？

何度見ても私の糸は途中で見えなくってて、葵の糸は二人ともに繋がっている。
これって、二人共の運命は葵だけってこと？　ってことは必要とされて召喚されたのは葵だけで私がこの世界に呼ばれたのは何かの間違い、もしくは葵のついでとして？
糸の先が見えないのは、私には運命の相手がいないって事？

神様もここまで私を外れ扱いにする事無いじゃない！
信じられない！　もう泣く。泣くわっ！　・・・くすん。

◆◇◇◆◇◇◆◇◇◆◇◇◆

あの後、王子様に召還の儀式の結果報告をしなくてはいけないということで、二人の案内の下執務室に向った。
所々に飾られている優美な装飾や調度品らに、いつもなら目を奪われ心躍って葵とともにはしゃぐところだけど、さすがに今日ばかり

は心の片隅で淡々と「凄いなぁ」と思うくらいだった。
葵がちらちらと私を気遣う視線をくれてるのがわかるけど。
…だめだぁ。やっぱり未だ浮上出来ない。

どこをどう歩いてきたのか最早思い出せないけど、「ここです」と、一つの扉の前でアランさんたちが立ち止まった。

「…失礼します。レオニールです。アランとともに召還の儀の報告に参りました」
とレオニールさんが扉を叩いて、声をかける。
「入れ」と言う声とともに補佐役の人に出迎えられ、私たちは執務室に入室した。

室内は華美よりもまさに実務！な雰囲気で、壁にはこの国のエンブレムらしきものや剣が飾られていて、厳かな雰囲気を醸しだしていた。
ぐるりと辺りを見回していると、補佐役らしき人ーー赤銅色の背中まである髪を首筋で結っている、青緑色の瞳の、一般的に好印象を持たれるだろう、誠実そうで優しそうな二十代半ばらしき青年と、

真珠色とも白金色ともいえる肩までの柔らかそうな髪と、きりりとした切れ長の瞳は、まるで吸い込まれそうと眼が離せなくなるような透き通った空の色で、滑らかなカーブを描いた顔のラインといい、薄い唇といい、抽象的な美貌でどこか儚げに映る雰囲気の中でも意志の強さを思わせる威厳さもあって。
細身だけど鍛えていると一目で判るしなやかな体躯と併せて、まさに絵本に出てくるような理想の王子様！な正統派美青年ーーもう目茶目茶格好良いかも！　と眼が合った。

「よう、フェル。望み通り結果報告に来たぜ」
ひらひらと片手を上げ、アランさんがにやりと笑う。
幼馴染だからか、気安いなぁ。
「フェル。こちらはアオイ。こちらがホタルと言うそうです」
レオニールさんが私たちを軽く紹介する。

笑顔でハキハキと自己紹介する葵とは反対に、しどろもどろになってしまう。
うう。ただでさえ人前で自己紹介って苦手なのに、王子様相手になんてさらに緊張するよぅ。

「私はフェルディ・リスタイン。フェルでいいよ。もうすぐ19歳になるな」
宜しくとフェルディさんが笑顔をくれる。
はうぅ美形さんの笑顔は強烈ですっ！　頬が熱いです。素敵ですっ。
それにしても今年19歳って事は、フェルディさんの儀式は来年って事だよね。
こんなに格好良い人の運命の相手に選ばれる人ってどんな人なんだろう。
ちょっと羨ましいかも。

「私はキース・ヴェル。年は26です。以後お見知りおきを」
にこにこと補佐役の人、キースさんも挨拶してくれた。
三人のお目付け役兼お兄さん的存在で、この春結婚したばかりなんだって。
幸せいっぱいって感じなんだろうなぁ。おめでとうですね！

「それで？　どちらがどっちの花嫁なんだ？」
フェルディさんが当たり前のようにそう質問して来た。
うう、来ましたね。当然だけど。思わず身構える私を他所に、
「それが…」と糸が葵にだけ繋がっていたと説明になると
「花嫁以外の者が召還された、などということは聞いた事がないな」
フェルディさん達が眉をひそめた。

ふいに「ホタルさんとアオイさんは双子なんでしたよね」と、とつとつと、思案顔したキースさんがそうきり出した。

「ホタルさんの糸の先が見えなくなっているということは、おそらくお二方どちらかとの運命が断ち切られたんでしょう」

運命が断ち切られた？
どういうこと？

怪訝そうな表情の私たちを見ながらも、
これは推測なのですが、とキースさんは話を続ける。

「もともと一つの命だった二人が、一度の儀式で同時に飛ばされてきたことで歪みが生じてしまったんでしょうね。糸を具現化する際にも、…おそらくホタルさんと、糸が繋がっていた者とが、両方互いに繋がっている事を強く否定していたんでしょう。だから、近くにいたアオイさんに絡んでしまったんだと思います」
せめて私たちが双子じゃなかったら、同時に召還されてなかったら、例え否定していたとしてもこんなことにはならなかっただろうと。

…強く否定していた？　私が？　互いに？
確かにアランさんとレオニールさんの二人とも葵が良いと言っていたけれど。
私があの時に想っていたことは、アランさんは苦手だし運命の相手はレオニールさんの方が良いなという事だけで。

ん？　なら。
「じゃあ、私の元々の相手ってアランさんだったの？」
ぽつりと呟いた独り言は思いっきり周囲に聞こえていたみたいで
ふと気づくと微妙に生暖かい視線に晒されていて。
引き攣った笑顔で固まっているアランさんと目が合った。

……。
……えーと。
もしかして自分が拒否されるなんて思ってもみなかった、というやつですか？

もつれる視線の、その先に絡み合うもの。（後書き）

お待たせしました。

やっと王子様登場です。キースさんもこんにちは。
それでもって、蛍の元々の運命の相手が判明（笑）
アランの口が悪かったからか、引っ込み思案でさらに女子校な蛍は引いちゃった訳ですよ。
…アランさん好きですよ？　けど彼にはガンバレと言っておきます（笑）

最初からレオニールさんの方が、葵の運命の相手でした。

それにしても自分の文章力・表現力の無さに転がり回りたくなります。
いやもうホントに誰か代わりに書いてくれないかな。
もう3話だというのに全然話が進まないんですがー！
ある程度先に進んだら改稿して余分な描写切ろうかな・・・

これまでと、これからを。

蒸らし時間を計り、均等に淹れわたるようにカップに紅茶を注ぐ。
厨房の片隅で作らせて貰ったお手製のマフィンとホイップクリーム
そして絶対これ最高級かいんだろうなと感心するくらい薫り高い紅茶。
茶葉はキースさんに頼んで用意して貰ったものだ。
もう直ぐ自分達の誕生日なのでケーキを焼こうと、小麦粉やら卵やらの材料も買っておいたのだけど、思わぬところで役に立った。

「えっと、お口に合うかわかりませんけど」
「蛍の作るケーキ美味しいんだよ？　つい食べ過ぎちゃうくらい好きなんだ」
紅茶とお茶受けをそれぞれの前に置くと、えへへと葵が嬉しそうに相槌を打つ。
「本当、これは美味しいですね」
「ああ。甘いものは苦手なのだがこれなら食べれそうだ」
「ホタルは料理が得意なのだな」
「……」
葵の賛辞に続くように口にした、キースさん、レオニールさん、フェルディさんが誉めてくれた。
ただのお世辞かもしれないけど、誉められるとやっぱり照れます～。
赤くなって俯くけど、何故かそれに反応して増した不機嫌なオーラにしゅんとなる。
というか何ですか。何なんですか。

あれから数日経つというのに。
未だ仏頂面が直らないアランさんは。

◆◇◇◆◇◇◆◇◇◆◇◇◆

元々がどうだろうと結局のところ糸は葵に繋がっているんだし？
アランさん顔は良いんだから、顔につられた女の人選び放題だったんだろうし？
私一人くらいがアランさんが運命だったらいやだと思ってたって、アランさんにとってはどうでもいい事、ですよね？
むしろお互いにとって運命が断ち切れたのは良かった事だってそう思いませんか？
ね、そうでしょう？　そうですよね、アランさん。
なのでもうこの話はやめにしましょうよ！

と、生暖かい視線を振り切るように、明るい雰囲気になるように、とにっこり微笑みながら頑張って力説したら、何故かアレンさん以外の男性から爆笑された。

葵は眼に掌を当てて「蛍ってば…」と呆れてるみたいだし。
アランさんは同意してくれるどころか憮然としちゃうし。
…お互いが気にいらないのなら運命が途切れたのは良いことだと思うんだけど。何で笑うの？

釈然としないままながらも一頻り笑ったら真面目な雰囲気に戻ったので口を閉ざす。

それで私たちの住まいをどうするかという話になった。
本当は召還した婚約者の用意する部屋に移る慣わしだそうだけど、
…葵の場合はね。
フェルディさんのご好意で、王宮内に素性を隠しての客人として部屋を用意してもらえることになった。
「一人では心細いだろう」とわざわざ続き間を選んでくれたんだ。
ああもうフェルディさんは優しいなぁ！

◆◇◇◆◇◇◆◇◇◆◇◇◆

で、糸の事なんだけど。
もともとアランさんとレオニールさんは王族ではないのだから
すぐにどうとかするのではなく、とりあえず保留扱いにして
二人共と結婚するのか、片方を選ぶのか、片方を選んだ場合は選ばれなかったほうはどうなるのかをゆっくり考えることになった。

葵には運命の花嫁の肩書きがあるけど、私には無いから葵付きの侍女として扱ってもらうことにした。
もちろん葵からは猛反対されたけど、名目が無ければ私がここにとどまる理由もないし、お菓子を作るとかお茶を淹れるとかといった本当に些細なことだけにすると押し切った。

もしも「糸が断ち切れたから蛍だけは帰っていいよ」と言われても葵ひとり残して帰れないから、私も自分がこれからここでどうするのか考えなくっちゃね。

これまでと、これからを。（後書き）

蛍は侍女になりました。

小さな太陽、その心情。（前書き）

これまでの話の葵視点のあらすじ？

小さな太陽、その心情。

高校に入ってすぐに告白されて付き合った初彼は一週間で別れた。
元々の好きの温度差が違っていたのもあるだろう。
押し切られてつい頷いただけで、彼のことはそんなに好きじゃなかったんだと、今はわかる。

色々な知識を幅広く吸収したい私と、コレと決めた専門知識を詰め込みたがかった彼とは話が合わなかった。

別れの決め手は、彼の、
「蛍ちゃんは地味だけど、葵はひまわりみたいに可愛いよね」
という一言だ。彼にとっては私への賛辞のつもりだったのかもしれないけど、私をひまわり呼ばわりしたのと同時に蛍を引き合いにしたのが許せなかった。
何時だったか、向日葵(ひまわり)って小さな太陽って言うんだろ？と「ちびサン」とあだ名を付けられそうになった。
もちろん問答無用で逆襲したけれど。
それ以来、私は自分の名前が好きじゃなくなった。
葵という名前は、まぁ気に入ってるけど、フルネームは…ね。

名は体を現すとはよく言ったもので、私が昼なら姉の蛍は夜だ。
蛍はこちらがやきもきするくらい大人しい。
お菓子作りが上手で控えめな蛍は、実は影で結構もててるのに自分では気付いてない。
私も簡単な料理ならなんとか作れるけど、材料をきちんと量るお菓子作りは苦手。

だから美味しいお菓子が作れる蛍を尊敬してる。本人わかってないけど。
私にとっての蛍の一番の魅力は、人見知りの蛍が見知らぬ人が多い所で所在無さげにしている時に声をかけたら、安堵して心からの笑顔を向けて近寄ってくる所だったりする。
優越感や庇護欲をそそられるっていうの？　そういう子が好みだって言う人にはたまらないんじゃないかと心配なんだ。
実際、去年の夏休みに家洗いしていた蛍の夏用のセーラー服の上が盗まれたんだよね。
もう着ないからって予備の制服だけで一ヶ月過ごしたけど。
それ以外の実害が無かったから、親にも誰にも言っていない。言っていたら今頃は強制で海外だろう。
注意を促しても「葵の制服と間違えたんじゃない？　葵こそ気をつけないと駄目だよ」とか「葵は可愛いからモテてるけど、私はモテないから大丈夫だよ」と笑うだけだけど、あなたもおんなじ顔でしょうが！
まったくもう！

いきなり飛ばされた世界で、遇ってすぐの人から花嫁扱いされた時は面食らった。
いくら顔が良い人だからとしても、何言ってんの？　って引くよね？
もし一人だったら戸惑って混乱して泣き出して、きっとその場から逃げ出していた。
私が落ち着いて居られたのは蛍も一緒だったからだ。
幸い引き離される事は無いみたいだから、それに関してはちょっ

と安心してる。

けれどね？　蛍が拒否ったせいか知らないけど。
アランさんは蛍と赤い糸で結ばれて居たはずなのに、何故か私と運命が繋がったみたいで……。
私今、二人の美形さんの花嫁扱いされて困惑してます！

レオニールさんは価値観が合うのか話してて楽しいし、勉強になる。一緒に居ると落ち着いた雰囲気でくつろげる感じがするし。……実は理想が集大成なんだよね。見ているだけでドキドキするんだ。

アランさんは一緒に居ると楽しい。性格が似た所があるのか、まさに友達って感じで楽に過ごせるんだ。

だから、どちらか選べといわれても困るんだよ。ホント…。
どうせならアランさんには蛍と上手くいって欲しかったと思う。

そしたら悩まずにすんだのに。

メイドさんから見た、恋の混戦模様。その1

この世界へと召還されてきてから数日経つ。

午前中は葵と一緒に、この世界のことを勉強することになった。
歴史や情勢などを学ぶ必要性を感じたためだ。スタートは一緒だったのに葵との差は直ぐについた。学ぶ意欲が違うから当たり前だけれど。

元々葵は福祉関係の仕事に就きたいと勉強を頑張っていた。
だからか、この国の問題の一つに孤児院の在り方があると聞いてからは葵は一層勉強を頑張り出したのだ。

やはり何らかの理由で子供を捨てる親はこの世界にもいるらしい。
その事実に胸が痛くなるけれど、厄介者扱いされたり虐待されるよりはマシなのかも知れない。
私達は鍵っ子だったけどちゃんと愛してもらっていたから、想像しか出来ないけど。

私はその子達にも家庭の温かみを知れるように、里親制度を充実させたり、保育士制度を作ればいいと思っただけだけど。
葵は適性にあった職業訓練をする事を主張した。名産品を作らせ販売する第三機関が必要だと。
作らせる名産品も何でも良いわけじゃなく、それが生涯の職に就けれるような物をと。
今までは孤児院の出身だと下働きに働きに出るしかない子が大半だったそうだ。

それ以来葵は孤児院の視察と名産品探しで走り回っている。
私はお茶の用意や、子供達へのお菓子作りくらいしか手伝えること出来なかった。

◆◇◇◆◇◇◆◇◇◆◇◇◆

私が侍女になったのを、葵は未だに良い顔をしていない。
けれど、「葵と一緒に居るために、ここに住ませてもらっている代議名分が必要だから」と無理矢理言い包めている。

私はあまり役にたつことは出来ないけど。何をするでもなく、ただぼうっと部屋にいる事も出来ない。
だから、これくらいはと葵が出かけている時は自分の部屋の掃除を手伝っているんだ。

「そんなことはしなくて良い」とフェルディさん達は言ってくれてるけど、一応侍女の立場なのだから遊んでいるわけにもいかない。
今日はレオニールさんのお仕事のお手伝いとして、雑用を申し出た。
といっても、私じゃお茶の用意くらいしか出来ないんだけれども。

そうそう、葵は今日、アランさんと二人でお出かけ中なのです。といっても目的は視察だけど。
お互いのことが判り合うようにと三人の邪魔をしないことに決めたんだ。

葵には幸せになって欲しいもん。

だけど、アランさんはあいかわらずちょっと意地悪。
最初の出会いからして印象悪かったせいか、地味な女は視界にも入れたくないのか、
葵を迎えに来た今朝だって、葵には笑顔で挨拶したのに私には「ああ」と冷たかったんだよ。
レオニールさんは何時もちゃんと私にも挨拶してくれるのに。

もしかして私が邪魔をすると思っているのかな？
葵のことを見てくれるなら、ちゃんとどっちも応援するのに。

やっぱりアランさんは、私のこと、…嫌い、なんだろうか。ちょっと悲しい、な。
あー駄目だ。暗くなっちゃう。嫌われてるなら歩み寄る努力をすれば良いだけだよね。
葵が選んだ人が義弟になるんだし。

そうそうそうだよ。葵のためだよ。お姉ちゃんは頑張るよ！

うんうんと頷き一人で無理矢理完結する。
無理矢理にでも何らかの理由をつけて、納得したかっただけかもしれない、けれど。

◆◇◇◆◇◇◆◇◇◆◇◇◆

コンコンとノックをし扉を開ける。
フェルディさんとレオニールさんの執務室はもちろん、お茶入れのために厨房までの道のりは覚えました！
その他の場所へは…まだ行けれない。絶対迷う。…知らないところで迷子にはなりたくない。

「レオニールさ…ま、お茶の用意が出来ました」
いつものようにレオニールさんと呼びかけそうだったけど、敬称を言い直したのは先客が居たから。
レオニールさんと近い方達なら、顔見知りになれたから”さん”付けしてたとしてもあんまりとやかくは言われないんだけど。
私は侍女の格好しているから、人前で気安くなんて出来ないよね。

失礼に当たらないように、ちらりと観察する。
お客様は二人。身分が高い人達なんだろうなと一見できるくらい上質な生地を纏い、オーラをかもし出しいてる、ナイスミドルな二人。
黒髪と金髪の格好良いおじ様だわーーって。あれ？
あまりにもぽかんとした顔をしていたのか、
「ーーああ、父だよ。私とアランのね」
とレオニールさんがくすくすと笑いながら教えてくれた。

やっぱりそうですか！　レオニールさん達の未来の姿はこうなるのね。
渋みが増してこれが大人の魅力って感じ。似てる似てると思わずまじまじと見てしまう。

こうしてみるとレオニールさんは言わずなしにも格好良いけど
黙っていればアランさんもやっぱり格好いい、よね。うん。

メイドさんから見た、恋の混戦模様。その１（後書き）

長くなりそうなのでその１として投稿しますね。

メイドさんから見た、恋の混戦模様。その2

「何だ。レオニール。お前が女性にそのように笑いかけるなんて珍しいじゃないか」
にやり、とレオニール父ーーリオンさんが口火を切る。
「あ、もしかしてこの娘がお前達の花嫁ってやつか？」
こちらもにやにやと、アラン父ーーアルフォンソさんが乗ってくる。
……こんなところもやっぱり似てるなぁ。

私達とはタイミングがずれていたのか、迄会うことなかったけれど、お父様方もちゃんと登城して仕事していたらしい。

子供が成人してすると、まずは父親の仕事の補佐を担当する。そして父親が担当する仕事を徐々に譲り受けていくのが、この国の基本。
レオニールさんたちの家は双頭って言ってたけど、役職が高い分、仕事の量が半端じゃないらしい。レオニールさん達に少しづつ分担し始めてるとはいえ、お父様方はまだまだもの凄ーく忙しいんそうだ。
だから、この国の貴族階級の男性は、１５歳で成人して仕事に慣れる、２０歳前後で結婚する人が多い。と説明された。

父親ズ相手だと分が悪いのか、レオニールさんはため息を吐く。
「違いますよ。彼女はホタルと言って、アランの元の相手です。私達の相手の姉ですよ」
……その説明の仕方は詳細までも筒抜けって事ですか。
「ええと……、はじめまして。どうぞこれからよろしくお願いしま

す」
作法も習っておけばよかったと後悔しながらも、エプロンドレスの裾をつまみ上げお辞儀をする。
中学の頃、１９世紀の西洋が舞台の映画にハマって、葵と一緒に令嬢ごっこしてたのを思い出しながらだから、間違っているかもしれないけど。しないよりはいいよね。
その映画の主演俳優を葵は一目ぼれしたらしく、ハート乱舞してきゃあきゃあ言っていたっけ。その男優さんを私も素敵だとは思ったけど、葵ほど熱を上げれなかった想い出がある。
それにしても緊張しているからか、さっきから日本人の得意技・愛想笑いが張り付いてるよ。大分引きつっているけど。

フム、と私の顔をまじまじと覗き込みながら、
「お嬢さん、可愛いね。……馬鹿だなアランも。こんなに可愛い子を逃すなんて」
アイツもまだまだ見る眼が足りないな。とアルフォンソさんは呟う。
「今の君も可愛いけれど」
ついと私の髪を解きながら、耳元で囁く。
「……こうするともっと魅力的だよ」
私からメガネを外しながら三つ編みで癖が付いた波立つ髪に口付ける。

……。
うーわー。やっぱり血が繋がっているだけありますね。アラン父！もーのーすーごーく、女の人に慣れてる感じがしまくりですよっ。
「私が後２０歳若ければ口説くんだけどね」
と大人の余裕で、初めての経験にうろたえている私を見てくつくつと呟ってる。

ひゃぁぁ。私、今。絶対、自分でも判るくらい首まで真っ赤になってる！
さすがに見るに見かねたのだろう。
「「アルフォンソ（さん）！」」
レオニール父子の怒り声が重なった。

「やりすぎだ馬鹿者」とアルフォンソさんを叱るリオンさんの説教を聞きながらほっと息を吐く。
不測の事態にどのような行動をするのか、私の人となりを見るために行ったことらしい。
びっくりしました。あーもー。

手元に櫛が無いのでとりあえず眼鏡だけをかけなおし、そのままだと邪魔なのでゆるく編み束ねる。
レオニールさんはじいっと私の顔を見つめていた。首を傾げつつ、何ですか？　と問う。
「アオイと双子だったのだな。そっくりだった」
「そりゃあ一卵性ですから」
世の中には性別が違ったりして似てない双子もいるけど、その人たちは二卵性。
一つの命が分裂しての一卵性双生児はまるっきり同じ顔だ。

けれど、産まれた時は似ていたらしい私と葵は今や見間違われることはない。
ちょっとづつ、性格も、髪質も全然違うからね。
眼鏡がないと見えないし、眼鏡込みが私の顔だと思ってる。
例え今葵が眼鏡をかけても、きっと私みたいに地味に感じる事はないだろう。

メイドさんから見た、恋の混戦模様。その２（後書き）

１５禁ならコレくらいの表現良い…よね？
予定の分までなかなか進みません…

メイドさんから見た、恋の混戦模様。その3

あの後、ささっと仕事の話に戻ったのでお茶を入れて退出した。難しい話はわからないし私は部外者だしね。

レオニールさんの執務室に積み上げられた書類が怒涛の量だったから、仕事の量が半端ないんだろうな。

あの量を子供に引き継がせるとしたら、そりゃ早婚になるわと納得した。

身につくまで相当の努力が必要だよこれは。

だとしたらお仕事の邪魔したら悪いよね。と部屋を出ようとすると、

「あいつ等が帰ってきたら、ホタルとアオイも家に招待するから準備しといて」

とアルフォンソさんに声をかけられた。さっきまで書類をみて眉を寄せていたのに。

リオンさんやレオニールさんも同様にこちらを見ているから、同類なんだろうな。

私が扉に目を向けるのを見逃さないで、私には笑いかけながら声をかけてニコニコしていたのに、私がつい頷くのを確認したら、すいと書類に視線を戻した。もちろんまた眉を寄せてる。

オンオフの切り替えスイッチが素晴しいです。まさに仕事が出来る男達って感じだよ。

そういえばパパもお仕事モードのスイッチ切り替えが上手だったなぁと思い出す。

自宅に居る時は家族にとても甘いパパだったけど、お仕事の時はきりっとしていて格好よかった。

パパもママも今頃どうしているんだろう。召還されたのがしばらくの間別れて暮らす覚悟をしながら見送った空港から帰り道だったせいか、こちらに飛ばされてきた直後は両親のことなど思考が麻痺していた。

けれど、数日経った今は少しは現実が見えてきたのかふとした瞬間にこうして考えるようになった。

だけどこうしてまだ落ち着いていられるのは、やっぱり葵と一緒に飛ばされたからだ。

１６年間一番近くにいた葵が一緒だったからこうして立っていられている。産まれてから何をするのもずっと一緒で、個別に部屋を分け与えられても自由に行き来していた。

クラス分けも、双子の場合は別クラスに分けられるのが普通なんだけど、人見知りが激しかった私は、他の子になかなか話しかけれなかった事でクラスから浮いてしまった事があった。それからは中学を卒業するまで、葵とはずっと同じクラスだった。

小さい頃着させられていたおそろいの服は、二人ともが着る二倍の量の服に変わったくらいで。

机の引き出し一段分くらいしかプライバシーが無いくらいに。葵は誰よりも私と近いんだ。

飛ばされる直前まで荷物を一緒に持っていた。その距離がお互いの泣き出すタイミングを逸らしてくれたんだと思う。

もし私一人だったらいつまでも泣き叫んでいただろうし、他の誰かと一緒だったとしても、きっと泣いて泣いて泣いて……今みたいに落ち着いてなんていられないだろうから。

葵のおまけ（結果的に）としての異世界召還には、何も思わないわけではないけど！

もし葵一人で召還されてたら、あの時点で私は一人で取り残されてた訳だから、一人で召還されてたとしたらな時とと同じくらいどうしたらいいのか判らなかっただろう。

だってスーパーから出た瞬間、妹が消えていました。なんて考えられる？　その説明を誰かに言える？

絶対絶対大騒ぎになって、パパとママの仕事の邪魔をして、他の人には私が葵を害したんじゃないかと疑われて、精神鑑定されるに決まってる。

そしたらその後のことは考えたくないくらい事が待ってるってわかるもん。

逃れられない運命なら開き直ったほうがマシだよね。

それに、葵がいない日常なんて考えられないから。

「葵は今から異世界に飛ばされます。あなたは残ってもかまいませ

ん。どうしますか？」と聞かれたらやっぱり一緒について来る選択するもの。
だからもう振り返らないって決めた。
心のそこでは出来ることならパパとママにだけでももう一度会いたいって渇望しているけれども。

そんな事をつらつら考えながら歩いていたら、いつの間にか見たことが無い廊下に出てしまっていた。
ううう。やっちゃったー。方向音痴だって自覚してるのに私の馬鹿ー。と心中で自分を罵倒する。

そうこうしているうちに近くの扉が開いて一人の女性が顔をだした。私より年上だと判る結構な美人さんだ。私と目が合うと、
「ふふっ。見かけない顔だけど、もしかしてあなたがアラン様やレオニール様が連れてきたという娘ね？　仲良くしたいわ。良かったら一緒にお茶でもどうかしら？」
と目を細めて笑いかけてきた。
なぜか笑っているのにＮｏと言えない雰囲気に押されて、つい頷いてしまった事を数秒後に後悔する。

部屋には他に二人の女性が居た。どちらもやはり年上だ。

ニコニコと笑っていたお姉さんは、扉を閉めた瞬間に豹変した。

「どんな手を使ったのか知らないけれど？　とても目障りなのよ、あなたが」

「アラン様やレオニール様に取り入ろうとするだなんて、迷惑に思われていることに気付かないの？」

「たかだか庶民の娘のくせに浅ましいにもほどがありますわ」

「きっとお二人は騙されてるんだわ。なんてお可哀相な」

目の前には、三人の怖い顔したお姉さん方。

私が口を開く隙が無いくらい「不釣合い」だの「小娘が」と次々と罵倒される。

この人達はアランさんとレオニールさんの取り巻きらしい。

どうやら私達が異世界から召還されたということは伏せられているそうで。

花嫁召還は王族だけの仕来りだそうから、王や側近の一握りの人以外はあの二人が行った召還の事実は伏せられているんだって。まぁ、これを機に希望する貴族の子息の花嫁全員召還とかになったら問題だもんね。

葵はアランとレオニールの二人が街娘を見初めて傍に召した……事になっているんだって。

この人たちは葵の顔は知らないらしく、私と葵を間違えているっぽい。

この人たちの話を要約すると、王子様には召還する花嫁が居るってわかっているせいか、アランさんとレオニールさんが花婿として最優良物件で狙っていた方達みたいだ。

いきなり現れた二人ともの花嫁候補の葵がかなり気に入らないらしい。

美形とお近づきになったがために、とりまきの怖いお姉さんから呼び出されるという、なんだかお約束な展開？　に陥ってるようで。

微妙に人違いなんだけどっ！　ひー。私、今ピンチです！

思わず吐き出しそうになるため息を飲み込んだ。

メイドさんから見た、恋の混戦模様。その３（後書き）

間がかなり空いてしまいました。

お約束お約束。な展開です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4569m/

赤い糸、繋がってる？

2011年1月10日23時46分発行